

プロローグ 「まえがき」にかえて

●……漢字を教えてはいけない

子どもに漢字教育をするというと、つい勘違いしがちなことは、「漢字で教える」ということと「漢字を教える」ということがまったく別なのだということに気づかないで、あくまでも教え込んでしまっているということです。

私は「漢字で」と「漢字を」ということを厳密に区別しているのですが、漢字教育というと、どうしても「漢字を」教えてしまうケースが多いのです。しかも、悪いことに、子どもがどれくらいわかったかを「書かせる」ことによってチェックしてしまいがちなのです。

しかし、漢字を覚えさせることが目的となったり、書かせたりすることはまったく無意味です。鉛筆もまだろくに持てない幼児に「旗」などという字を書かせることには無理があります。無理なことは苦痛になりますから、結局、身につかないのです。それどころか、無理に漢字を教えるから

漢字嫌いになってしまうのです。

私が提唱している石井式漢字教育では、次の三つを基本理念としています。

- 一、漢字を教えてはいけない
- 一、漢字をどれだけ覚えたか、テストをしてはいけない
- 一、漢字を書かせてはいけない

漢字教育をする場合、子どもに漢字を書かせる必要はまったくありません。ないどころか、漢字を書く能力は幼児の才能開発にとって何のプラスにもなりません。小学校に入ってからでも、漢字を書き取る能力はほとんど必要ないのです。

極端なことを言うようですが、小学校に入って、もし書き取りの試験で悪い点を取ってきてても、叱る必要はまったくありません。むしろ、わざわざ漢字で零点をとってきた子どもの頭をなでやる必要はありませんが、叱ったり、復習させる必要はないということです。

漢字のテストでいい点を取ることと、子どもの脳を活性化させることは少しも関係ありません。

漢字は読めさえすればいいのです。漢字が読めるようになると、親が放っておいても本を読むようになります。そうすると、幼児の脳は活発に動き始めるのです。

現に、私は息子が小学生になって書き取りの宿題を出されて帰ってきてても、息子には一切やらせませんでした。書き取りをやって、それができるようになったからといって頭がよくなるはずがないと確信していたからです。

一時間も二時間もかけて漢字の書き取りをさせるくらいなら、本を読ませたほうがはるかにいいのです。今だから言えることですが、息子の代わりに、私が宿題の書き取りをしたこともあるほどです。わざと子どもの字を真似てへたに書いてやったものです。そこまでしなくても……と思われながらも、それほど、子どもにとって漢字を書かせることは無意味だと考えていたからです。

●……漢字を書かせてもいけない

私の基本とすることは、あくまでも漢字は読めればいい、書ける必要はないということです。漢字が読めて、その意味を理解できさえすれば、書くこと、ましてや筆順などということは無意味に等しいのです。世の中に出て、漢字を書くときに、筆順が違って不自由したことがありますか？ レポートや報告書を書くときに筆順までチェックするような上司はいたでしょうか？ 日常生活の中で、あるいは仕事を進める上で、筆順を間違えて何か不便なことがあったかという、何も無いはずですよ。

もちろん、漢字を教えた以上は、子どもがどれだけわかったか確かめたいでしょうし、それも必要でしょう。また、どれだけ理解したかがわからなければ、それから先に進むことができないことも事実です。しかし、テストをしてはいけません。子どもにとってテストはあまり楽しいものではありませんから。誰でも経験があると思いますが、試験が近づくと憂鬱になるものです。それこそ、学校が火事で燃えてしまえばいいなどともないことを考えたものです。

現に、最近では、自殺すると学校を脅して試験を中止させるような出来事も起きています。子どもにとっても、それほど試されるということは嫌なのです。しっかり覚えたかどうかを試すから勉

強嫌いになってしまうのです。

ではどうしたらよいのか……子どもが試されたとわからないように確かめればよいのです。さり気なく「この字、何だったかしら？」と聞いてみるのです。確かめるような言い方や咎めるような言い方はよくありません。

ちゃんと読めたら褒めてやります。褒めることは非常に大切なことです。もし読めなかったとしても、絶対に叱ってはいけません。もう一度、教えてやればよいのです。つまり読めても読めなくても、親が顔色を変えるようなことをしないことです。

正しく読めたら褒めてやる。読めなくても叱らない。たったこれだけのことです。漢字だけでなく、どんな勉強でも同じことです。たったこれだけのことで、子どもを勉強嫌いにさせなくてすむのです。

要するに、教えてはいけないということです。教えようとするから、きちんと覚えたかどうか、確かめなくなるし、覚えていなければ叱りたくもなるのです。一種の遊びだらけの気持ちで、親子で楽しみながら始めてほしいのです。漢字をコミュニケーションのきっかけにしてくればよいのです。漢字は会話の材料です。日々の生活の中で触れていれば、自然にわかってくるもので、こういうものこそ本物です。教え込まれて覚えたものや、嫌々ながらやったものは、脳が受けつけません。それでは本当の知識にはならないし、脳も活性化しないのです。

●…漢字教育は幼児期から継続して行おう

「かなより漢字のほうがやさしい」と言われても、大人には理解しがたいことでしょう。自分たちの教育がかなから始まったから、どうしてもかなはやさしく、漢字はむずかしいという先入観から抜け出せないのです。

「あり」より「蟻」のほうが子どもにとってわかりやすい、という理屈はわかったとしても、実際に自分の子どもに漢字教育をするとすると、ためらってしまうことが多いのではないのでしょうか。それは自分が習ってきた固定観念にとらわれているからです。

かなから教育するということは、明治時代からずっと続いてきました。もっといえば遠く平安時

代には、かなは女文字といわれ、男性が書く漢字と違ってやさしいという記述は、『土佐日記』の中にも出てくるのでご存じだと思います。

したがって、小学校に入る前は、せめて自分の名前ぐらいはかなで覚え、漢字は小学校に入ってから習えばいいと思いがちです。しかしこれは大きな間違いで、小学校に入ってからでは遅いのです。脳の働きがもっとも発達する時期に漢字を学習することがいちばん効果的で、かつまた楽しみなから覚えられるのです。

しかし、一般的にはこのことが理解されていません。もしためらいが残るようでしたら、実際に試してみることです。幼児に漢字と“かな”の二枚のカードを見せて、どちらがよくわかるかを実験してみれば一目瞭然です。

なぜ、漢字のほうがやさしいかというと、子どもの脳には鳩とか蝶、桃という漢字の形が頭の中にそのまま入るのです。公園で鳩を見せて、あれが鳩だよと言って、「鳩」という漢字を見せれば、いっぺんで覚えてしまうのです。「は」とではなかなか覚えられないのです。

この辺は後で詳しく説明しますが、いずれにしても、この漢字教育は継続することが大切です。

頭は毎日使わなければよくなりません。いくら栄養価の高い食べ物でも一か月に一度ではダメなように、脳も今日は使ったけれども、明日は使わないというのでは意味がないのです。

幼児期から、毎日コツコツとやっていくのです。一日に一字読めるようになればいいのです。これを三歳の時から始めたとしみましょう。毎日続けると、小学校に入学するまでに小学校で習う漢字がすべてわかるようになります。これだけ知っているということは、その後の学習にも大きな差を生むことは明らかでしょう。

●…漢字によって読書の喜びを知り脳はグングン成長する

では、どうして幼児期からの漢字教育が望ましいのでしょうか。なぜ、書けなくてもいいけれど、読めることは不可欠なのでしょうか。

それは読書力を養うためなのです。本を読むためには、漢字が読めることがどうしても必要です。ひらがなだらけの絵本では、吸収できる内容には限度があります。与えられた最小限のもの

はわかるでしょうが、それ以上の発展はありません。

もし自分で本が読めたり、百科事典で調べることができるだけの漢字力がついたとすると、子どもの世界は大きく広がっていきます。本が読めるということは、言葉が増えることにつながります。言葉が増えることによって、表現力や感受性も豊かになります。

私たちが親として、してやるべきことは、子どもに本を読む力をつけてやることです。幼児期のうちにその能力をつけるための手助けとして漢字教育を行うことです。そして、そこから先は、子どもが自分から進んで本を読んで物事を吸収できる力を養う、すなわち「学ぶ」ということの喜びをわからせてやることです。

その後は、子どもの教育に関しては何もやらないことです。やたらと手を出すことはかえってマイナスです。そのうちに最初は何でも親に聞いていた子どもが聞いて来なくなります。何でも自分でやりたい子どもは、自分で学習する喜びを知って成長していきます。読書力がつくということは、子どもの世界が広がることにつながります。

●……親も一緒に楽しくむことこそ真の教育

詰め込み式に漢字を学習させられた私たち大人にとって、漢字にはいいイメージがありません。漢字の書き取り試験のための勉強は苦痛でした。大人になって試験から解放されて初めて、漢字は楽しいということに気づく人も多いと思います。

ある出版社の編集者に聞いたのですが、ビジネスマン向けに漢字の本を出版したら一〇万部をこえるベストセラーになったそうです。また、この出版社では、やはりビジネスマン向けに『数学がわかる本』とか『数学オンチのための微分と積分』という本を出したら、これも一〇万部を超える売れ行きだそうです。

漢字も数学も試験があるから嫌いになってしまうのです。しかし、本当は漢字や数学の面白さを知っているのです。ですから大人になって、ちょっとややこしい漢字や面白い漢字に出会うと新鮮に感じられるのです。微分や積分の本が売れるのも同じ理由でしょう。今さら微分や積分を知ったからといって、仕事には何の役にも立ちません。昇格試験に出題されるわけでもありません。で

も微分や積分の面白さはわかっているのです。

現在の小学校で行われている漢字教育では、漢字を好きになることはできません。一〇〇人の子どもに聞けば、ほとんどが嫌いだと言います。たぶん好きだと言う子どもはいないでしょう。原因は一つです。漢字を書かせているからです。書くことにエネルギーをとられてしまい、漢字が読めることの楽しみを実感できないから好きになれないのです。

テレビで育った世代のお父さんやお母さんは、自分たちもあまり本を読まないから、漢字は不得手だという方も多いでしょう。生活の中でこれだけ漢字に囲まれていますから、多少の漢字コンプレックスもあるのではないのでしょうか。そんなときに、自分も子どもと一緒に漢字教育を始めるのは楽しいことです。

この本の後半に出てきますが、漢字の成り立ちを知ること、“かんむり”や“へん”の持つ意味を知って漢字を見ると、面白くなってきます。親も興味を持って漢字と接し、その気持ちを子どもに伝えながら一緒に学習して行くと、子どもの漢字への興味もわいてきます。自分でその喜びを知るとします。文字の形を見て推理する能力も養われてくるのです。

漢字を覚えて読書の喜びを知った子どもは、自分で解決しようとする能力や自主性が育っていくのです。自分で考えるよいトレーニングにもなります。そのためには漢字は早くから読めたほうがいいのです。

私はこの本を通じて、親と子が一緒に楽しく漢字を学んで欲しいと思っています。

漢字は読むものであり、遊びであると思えば、今までの漢字に対するイメージがまったく違うものになってくるのではないのでしょうか。